

団長の独り言

12月21日(日)

「前半・後半に分けて通してみました。」

この土日の稽古で、土曜日に後半、日曜日に前半を通してみた。

通して芝居全体を見てみると、これまで行つてきた「抜き稽古」では見えなかつた「不自然な芝居」が結構あつた。

何度も何度も各シーンを繰り返し、丁寧にやつて、動きも芝居も何度も修正し、演じる役者と話し合ひをしながら各シーンを作り上げて来たのに、いざ通してみると「?」つてなるんだから、芝居は通してみなきや分かんないよね。

何度も何度も各シーンを繰り返し、丁寧にやつて、動きも芝居も何度も修正し、演じる役者と話し合ひをしながら各シーンを作り上げて来たのに、いざ通してみると「?」つてなるんだから、芝居は通してみなきや分かんないよね。

何度も何度も各シーンを繰り返し、丁寧にやつて、動きも芝居も何度も修正し、演じる役者と話し合ひをしながら各シーンを作り上げて来たのに、いざ通してみると「?」つてなるんだから、芝居は通してみなきや分かんないよね。

今日の稽古でも、1幕の初端から芝居を止めたといふ場面もあつたけれど、「通し」って事でグッと抑え、ひたすら「ダメ出しノート」にダメを記し、さらに芝居を進めて見いくと、他の場面では通し稽古の良さも出てきて、「役の人物に魂が入つた」とでもいうのかな? 活き活きした人物達が、物語の世界を縦横無尽に駆け巡り、引き込まれるシーンもあつた。

だからこそ余計に「不自然な芝居」が目につくつてもので、ラストのクライマックスシーンなんかも、何度も何度も繰り返し行つてきて、「よっしゃ! 完璧じゃ!」

と思っていたにも関わらず、昨日の通しでは「なんか違うな」と感じてしまった。

これが「通し稽古」ってやつ。

「抜き稽古」で出来たからと言つても、必ずしも「100点」つてわけではなく、

本番を想定した「通し稽古」を行つて、初めて見えてくるものつて意外とある。

つまり、「通し稽古」と「抜き稽古」では緊張感やリズム、そして間合いとかが違うので、実戦(本番)を想定した「通し稽古」は、とても重要なだといふことが、

昨日、今日の稽古でもよく表れていた。昨日、今日の稽古でもよく表れていた。

そういえば、今、巷ですごい数の「演劇ワークショップ」つてものが開催されているけれど、そこでのレッスンの中には、エチューという寸劇もあつたりする。

ただそのエチードつてのは、あくまでも役者個人のスキルアップが目的なので、いくら本格的演劇プロジェクトのワークシップとはいども、実戦(本番)を想定した「通し稽古」とでは、緊張感や相手役のと間合いとかは、やはり違うと私なんかはそう思う派。

それは劇団ふあんハウスで毎回開催しているワークショップも例外ではない。

特にふあんハウスの場合、どこぞの本格的演劇なんちやらワークショップのよう

いう魔法のような事は謳つてはいない。

「演劇を体験してみたい」「楽しくお芝居

つてものに触れてみたい」「身体を使って表現するってことを体験をしてみたい」等の「お芝居を楽しみたい」という事を目的とした演劇ワークショップなので、毎回

「笑い」と「温かさ」を意識しつつ、充実感を味わつてもらうように努めている。

そんな劇団ふあんハウスのワークショップではあるが、受講生の中から実際に出演者として参加する人は数多くいる。

その皆さんが口を揃えるのは、「ふあんハ

ウスのワークショップのレッスンと、公演の稽古つて全然違いますね」という事。

お客様から入場料を頂戴してお芝居をご覧いただくのだし、「自分のため」に参加するワークショップと「本番のため」の稽古では、まるで違つてくるのは無理もない。

そういうれば過去に、劇団ふあんハウスワークショップ受講生の方で、すっごくセンスが良くていい芝居をする人がいたので、「せひ! 創団ふあんハウスに出演を!」とオファーをしたら、「本公演は色々と制約もあるし、稽古に毎回参加するのは煩わしいし、何より失敗すると、お客様はもちろんの事、共演者の皆さんにも迷惑をかける事になるので、僕はワークショ

ップしかやりません」という人がいた。

「抜き稽古」で悩み苦しみ、そしてドキドキしながら「通し稽古」を行つて、よりいいものにすべく修正を施して、また「通し稽古」に集中し、ようやく本番に挑む! というのが、芝居の創り方だと思つてゐる。

こんなやり方も、なんでも合理的な今の時代では古臭いつて言われるのか?

なあくんて事を考える暇もなく、劇団ふあんハウスの稽古は続くのでありました。

なるほど、そういうお芝居の楽しみ方も

あるのかあと妙に感心した記憶がある。

それはそれで「趣味」として、演劇ワーク